

## フリースクールでの SW 実践を考える⑥

高名 祐美

2023年4月。こども基本法が施行され、こども家庭庁が設置される。「こどもまんなか社会」の実現に向けて国が本腰をあげている、と思いたい。が、現状はどんなふうに変わっていくのだろうか。

フリースクールでこどもたちと過ごしながら、今後の変化に思いをめぐらす。不登校のこどもは年々増加の一途をたどっている。私の勤務するフリースクールは現在5名の小学生が利用している。姉弟で利用している事例もある。ここで過ごす週2日の時間は、こどもにとってどんな意味があるのか。少ないスタッフと限られた空間では提供できるプログラムは限られてくる。5人それぞれの個性がぶつかりあって、うまくいかないことも多い。ひとりひとりのこどもが安心して過ごせる場所になっているのだろうか。自分の関わりをふりかえる。フリースクールの利用がきっかけとなって、こどもが自分らしく生きていく術を見つけることに少しだけ手をかすことができたらとも思う。

### <浩介くんのこと>

浩介くんは小学校3年生。ADHDと診断されている。昨年11月、お母さんが相談に来所した。家族はお父さん、お母さん、中学1年の姉との4人ぐらし。

#### 【利用相談のインテーク面接】（一部抜粋して）

SW：ここ（フリースクール）は、どんなふうになりましたか？

母：インターネットで調べました。

SW：インターネットですか。当所のホームページですね。

母：はい。学校以外でどこかいくところはないかと探していたんです。あちこち行ってはみるんです。でもどこもいきたがらなくなってきて。学校には5月の連休明けから週1日の登校になって、2学期からはいかなくなって。特別支援学級なんですけど。それでタブレットが学校から支給されて、オンライン授業なのですが、それもこの頃はうけません。「しんどい」というんです。

SW：「しんどい」と言うんですね。家ではどんなふうにご過ごしていますか。

母：プログラミング2時間、パソコンゲーム1時間半って決めています。そのほかは、私の手伝いをしてくれたりします。洗濯物をたたんだり、料理を手伝うこともあります。近

所には友だちがいないので、友だちと遊ぶのができなくて。「遊びたい」って思っているようです。

SW：「友だちと遊びたい」のですね。遊べる場所をということでしょうか。

母：はい。勉強は正直そんなに望んでいません。**元気に**楽しく過ごせたらと。

SW：「**元気に**」。大切ですね。浩介くんの得意なことや苦手なことをお聞きしてもよいですか。

母：好きなことはやっぱりパソコン関係ですね。プログラミングとYouTubeでみる化学の実験、ダンボールで工作するのも好きです。苦手は国語。特に漢字です。字を書くのが嫌いなんです・・・

SW：なるべく浩介くんの好きなことができる時間をつくりたいと思います。そして今ここを利用している男の子と仲良くなれるといいですね。一緒にひるごはんをつくるのですが、料理はいかがですか。

母：大丈夫です、料理は好きです。食べるのも好きなので。(笑)

SW：わかりました。なにかここで過ごすにあたって、気をつけることがあれば教えていただけますか。

母：苦手なことやできないことに取り組めたら、「よく頑張ったね」と声掛けしてほしいです。あと予定を伝えてください。次に何をすることがわかっていると安心できるようです。

SW：わかりました。お母さんは、ここにどんなことを求めていますか。

母：家に閉じこもって孤立しないで、家族以外の人とかかわりをもってもらいたい。学校にいけなくても、元気で過ごしてくれればそれでいいって思っています。いろんな人とかかわれたらって思います。とにかく元気でいてほしい。

浩介くんの校区にはフリースクールは存在していない。インターネット検索で自宅から一番近いフリースクールをみつけ、相談の電話をかけてきたお母さん。一番近いとはいえ、浩介くんの自宅からフリースクールまでは車で40分ほどかかる。送迎について尋ねると、お母さんは「今は仕事をしていないので、私がします。」と。

私がお母さんと面接している間、浩介くんは別のスタッフが対応した。浩介くんは落ち着きなく、スタッフがいろいろ遊びを提案したが、集中することができなかった。

面接を終え、母と私は浩介くんの待つ部屋へ移動した。浩介くんはお母さんをみると、「帰ろう、疲れた。帰りたい」と部屋から出ようとする。母は入り口で立ち尽くしたまま、その場を動こうとしない。息子へ声もかけない。息子の動きを止めようともしない。「家にいてもゲームばかりして過ごすので。人と接してほしい。元気で楽しくしてくれればそれでいいんです。」と積極的に語ったお母さんとはまるで別人のようだった。「帰ろう」という息子になにも答えず、立ち尽くしている。こんなことが日常的なのだろうか。浩介くんの日々の暮

らしやこれまでの親子の歴史をもっと知りたいと思った。

利用は週1回、午後2時間から開始した。そこで浩介くんは同じ小学3年生のなおきくんと出会った。共通の好きなこと(カードゲーム)があった。パソコンのゲームやYouTubeについても話題にできる。会話がはずみ、一緒にカードゲームに取り組んで楽しんでいる。もうひとりの5年生のはるとくんとはレゴでロボットを作って時間を過ごすことができた。

少し慣れてきた頃、『みんなでクレープをつくろう』のプログラムがあった。それに参加するために、午前中からの来所を提案した。「うん。わかった」と返事があり、当日もエプロン持参でやってきた。「僕は何をしたらいいですか。わからないから教えてください」としっかり伝えてくる。できないことはできないと伝えることができる。チャレンジしたことがうまくできないと、「手伝ってください」とヘルプを求めることもできた。またやったことのないことには「教えてください」と取り組む姿勢をみせてくる。求めてくることにしっかり向き合うことで、浩介くんは不得意なことひとつずつできるようになっていった。

ある日。「今日のお昼はシチューだよ。」と伝えると、「シチュー大好き。ありがとう。」と誰よりも先に大きな声で返事をしてくれた。シチューが好きな浩介くん。「ありがとう」というその言葉に私も嬉しくなった。そして、「今日のお米ときは誰がする?」と尋ねると、「今日は僕がする!」と一番に名乗りをあげてくれた。お米とき、浩介くんには難しい作業だけれど、仲間が手伝ってくれてなんとかできた。そして炊きあがったご飯、シチューと一緒に、誰よりもたくさん量を浩介くんが食べた。

迎えにくるお母さんの表情にもまた変化がみられた。初回でみた、凍りついたような表情が消え、その日の様子を伝えると笑顔で言葉を返してくれる。「そんなにいっぱい食べたんですか。好きなものだから。ここにくるのは楽しいって言ってます。」。浩介くんの週1回の利用は週2回へ、そして時間も10時から15時までになった。

ソーシャルワーカーとしての役割を考えると、学校と情報を共有し連携することや、チームをつくる必要があると考えてきた。しかし現実には、日々の個別の関わりから前にすすむことができず、私はもやもやしていた。「チームで関わらなければソーシャルワークと云えない」そんな思いがあったように思う。医療の現場で、チームで関わる退院支援を実践してきた長いMSWとしての経験が弊害になっていたのかもしれない。

浩介くんとお母さんには、短い時間でも「面接」を意識した会話をこころがけてきた。その結果、二人それぞれの変化を感じることができた。こどもやお母さんの個別ニーズをとらえ、課題解決にむけて取り組む。成長過程にある浩介くん。これからの人生、たっぷり時間はある。ともにゆったりと過ごす時間が大切だと改めて感じている。浩介くんが家族以外の人と接する体験を重ねて、元気に、そして少しずつ確実に成長してほしいと切に願う。